

すががも通信

58号

行徳野鳥観察舎友の会会報

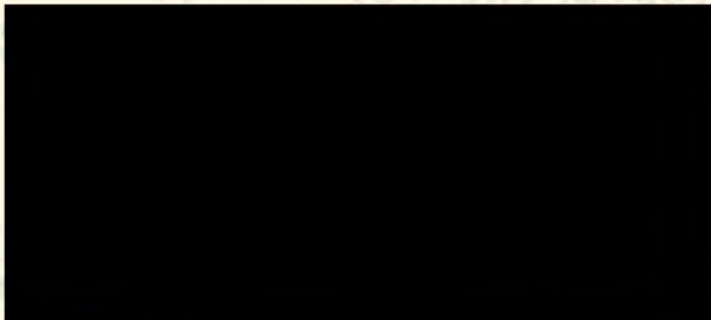
1989年10月1日発行

特集

伊良湖岬



市川 拓 画



は お と

国際干潟シンポジウム NAGOYAに参加して

国際干潟シンポジウムNAGOYAが、9月16・17日両日、名古屋港の藤前干潟を中心に開かれました。テレビ・新聞などでもとりあげられましたが、全国から150人の参加者がありました。

友の会の蓮尾純子さんも、講演者として招かれ、「丸浜川の浄化と湿地造成による水鳥の誘致」をテーマに話をしました。なかなか好評だったようです。また、アジア湿地目録（英文）と日本湿地目録（邦文）の完成の発表がありました。

今回参加して、次の二つが印象に残りました。

一つは、水質の保全・浄化に、干潟を含む湿地が、重要な役割をはたしているということです。そして、干潟のような酸素が十分に含まれている水域は、生産性がとても高い場所でもあるようです。私たちがやってきた水車による丸浜川への酸素の吹き込みは、理に適ったことだったのです。

そして、水の中から汚れ（有機物・窒素・リンなど）を取るのに、バクテリアが大きな働きをし、食物連鎖をうまく利用すれば、さらに効果があがるのです。まるで、私たちがやってきたこと、そのままです。

もう一つは、干潟によってそこに住む底生動物が異なり、その違いは、それをエサとする鳥たちが、その干潟を利用できるかどうかに関わりがあるということです。これは、

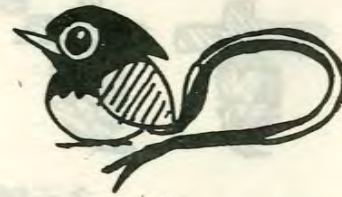
「ここを埋め立てるから、あっちの干潟に行きなさい」と言っても、その通りにはいかない種類がでてくることを、意味します。しかも、一つの干潟に住める鳥の数には、当然、限りがあり、それを越えた分については、

『死』しかないのです。とくに、シギ・チドリについては、越冬地の干潟が重要であり、種の存続にさえ、関わることもあるようです。

もちろん、渡りの途中はどうでもよい、ということではありません。つまり、いろいろなタイプの干潟や湿地があることが大切だ、ということなのです。

発表の半数近くが、英語の通訳付で、日本語によるものも同時通訳されている、というたいへん国際的なシンポジウムでしたが、非常に有意義な日をすごすことができました。

なお、蓮尾さんの発表を何回も聞いてわかったことは、時間が短いと出来にバラツキがあり、しかも、あまり良くないようです。したがって、今後、講演を依頼される場合は、最低でも40分、できれば1~2時間の用意をされるとよいと思います。(Tc)



特集

秋がく~れば思い出す...

伊良湖岬

桑名佐由巳

尾瀬賛歌

♪夏がく~れば思い出す.....♪

私にとってのその場所は、歌のとおり“はらかな尾瀬”です。

初めて尾瀬を訪れたのは、大学に入って最初の夏休みでした。

黄色いじゅうたんのようにつき乱れるニッコウキスゲ、ふわふわした白い綿毛が可愛いワタスゲ.....

これほどまでに一面につき乱れている花を見たのは、生まれて初めてでした。後で聞いた話によると、この年は数十年ぶりにニッコウキスゲとワタスゲの当たり年が、重なったのだそうです。花は、年によってたくさん咲く“当たり年”とそれほど咲かない“はずれ年”があるのです。

翌年の夏は、サブレンジャーとして、20日以上尾瀬で暮らし、それから後も折にふれ、峠を越えています。いつ訪ねても、その時その時の美しさで迎えてくれる、懐かしい尾瀬.....。しかし、あの初めて訪れた時以上に、美しいことはなかったように思います。

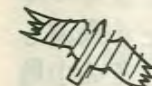
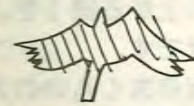
さて、夏が過ぎてしまうと私の通っていた大学（東京農工大学）には、試験の季節がやってきます。そしてこの山を越えればいつのまにか10月です。

10月がくると思い出す.....私にとってそこは“伊良湖岬”です。

「桑名さん、鷹柱って知ってる？」

「えっ？ 蚊柱なら知ってるけど...」

“鷹柱”がたつという伊良湖岬。いたい、どんなところなのでしょう。





渡る、渡る

野鳥を見ることが好きな人達には、いろいろなタイプがあります。

シギ・チドリ・カモなど水鳥が好きな人、山の小鳥が好きな人、ワシ・タカといった猛禽類が好きな人、とにかく珍しい鳥が好きな人……。

私は、どちらかという水鳥を見るのが好きです。でも、まるで蚊柱のように舞い上がって、南の国へ渡っていくサシバというタカ……ぜひ見てみたい！

伊良湖岬というのは、愛知県渥美半島の先端で、美しい海に囲まれたところです。黒潮の影響を受け冬も温暖な気候でメロンやスイカがたくさんつくられています。また、あちこちに温室があって、日没とともに電灯がとまります。“電照菊”といって、年末からお正月に咲くように、キクを栽培しているのです。

この伊良湖岬の松林に、9月の下旬から10月の中旬にかけて、数千羽のサシバというタカが集まってきます。そしてよく晴れ上がった日、上昇気流に乗っていったん空高く舞い上がってから、次から次へと切れ目なく、滑るように南へ渡っていくのです。その舞い上がる様子を、タカ柱と呼んでいるわけです。

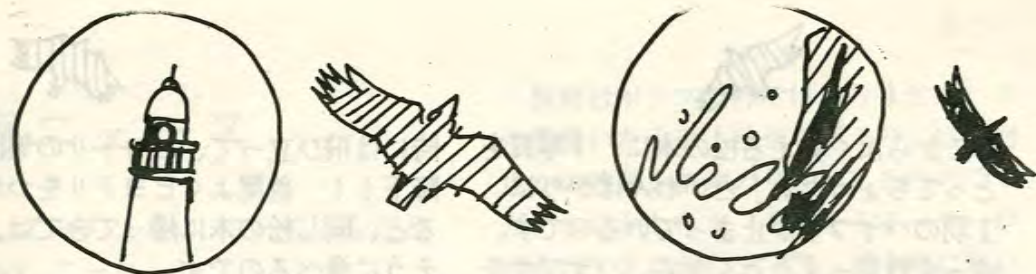
サシバは、ハシボソガラスくらいの大きさの鳥です。日本には夏鳥として4月頃やってきてヒナを育てた後、南の越冬地へと渡っていくのです。

「ピクィー、ピクィー」とよく鳴くタカで、トカゲやカエル、バッタなどを食べます。

「鷹一つ 見付けてうれし いらご崎」
松尾芭蕉が見つけたタカは、サシバだったのでしょか……。

ところで、伊良湖岬から渡っていく鳥はサシバだけではありません。タカの仲間のハチクマや、ヒヨドリなど小鳥達も伊良湖岬から渡ります。そしてその小鳥達をねらって、ハヤブサもやってきます。

ヒヨドリ達はハヤブサなどから身を守るために、集団で渡っていきます。が、サシバ達はそういう集団は作りません。目指す方角は同じですが、1羽1羽思い思いの高さで飛んでいくのです。



再会—ヒト、トリー

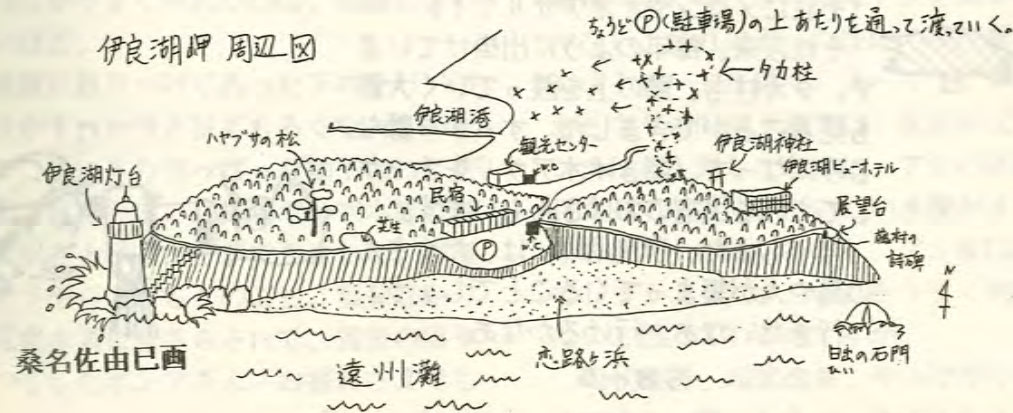
天の川のように流れていくタカ、近くの松林や神社にはいろいろな小鳥、海岸を歩けばイソヒヨドリ、海に目をやればオオミズナギドリ……。

これだけたくさんの鳥達が集まっていると、じっとしてられない人達がいいます。うまい具合に10月10日は“体育の日”。この休日や日曜日を利用して、鳥好きの間も伊良湖岬に大集合です。

「やあ、お久しぶり」
「今年の渡りはどうでしょうね」
あっちでもこっちでも、あいさつする人、鳥の情報を交換する人、人人人……
鳥を見にきた人々は、「恋路ヶ浜」という浜辺の前に並んでいる約10軒の民宿をよく利用するようです。民宿の前方

には無料駐車場があり、目の前はすぐ海です。人々は、この駐車場や民宿の屋上から、タカの渡りを眺めるのです。私も伊良湖岬へいくと、民宿のお世話になります。夕食のいろいろなお刺身、デザートにメロンにパイナップル。アサリとは名ばかりで、ハマグリと同じくらい大きいオオアサリ（ウチムラサキガイ）。民宿のおばさんに焼いてもらって、たまりじょうゆで食べるととっても美味しい！
鳥はもちろん、美味しいものがたくさんあるところも、伊良湖岬の魅力でしょうか。（少なくとも私にとっては♡）

この時期の伊良湖岬の名物で忘れてはいけなは、ハヤブサです。駐車場で見物に少し飽きたら、道端のナンバンギセルを見ながら、伊良湖灯台へと歩いてみましょう。少し行くと、右手に芝生がはってある開けたところがあります。



そこからよく見える松の木に、「写真をとってちょうだい」といわんばかりに、1羽のハヤブサが止まっているのです。ゆっくりじっくり近くから、ハヤブサを観察できるうれしい場所です。そのうえ

時には飛び立って、ヒヨドリの集団に急降下!! 首尾よくヒヨドリをつかまえると、同じ松の木に帰ってきては、得意そうに食べるのです。

目立ちたがりのハヤブサ君。今年もまた会えるでしょうか。



伊良湖賛歌

D画

「名も知らぬ 遠き島より ながれ寄る 椰子の実一つ…」

島崎藤村の有名な「椰子の実」は、伊良湖岬の恋路ヶ浜に流れついた椰子の実の話が素材になったそうです。その恋路ヶ浜の東側の端の崖の上に展望台があり約270℃の展望で海が眺められます。藤村の「椰子の実」の詩碑も建っています。

思えば5年前の10月以来、毎年のように訪れている伊良湖岬。実は最初に訪ねたときは、鷹柱どころか1羽のサシバも見ることができなかったのです。ふだんの心掛けが悪かったのか、運悪くほんの数日、渡りの日とずれてしまったようでした。けれど展望台まで歩いて行って眺めた海の青かったこと……。

(それにメロンやオオアサリ?!)

それ以来、毎年のように出掛けています。タカ柱も、頭の上を渡っていく大群も見ることができました。すっかり顔なじみになって、焼きオオアサリをオマケしてくれる民宿のおばさんもいます。

今年もまた、伊良湖岬には、たくさんの鳥や人が集まってくることでしょう。行きたいなあ。行けるかなあ。



D画



水車ニュース

えい、こーら。えい、こーら。もひとつ、えい、こーら。

2年間というもの、文句も言わずに働いてくれた揚水ポンプが、ついに動かなくなりました。8月18日、そのあたりにいる若者どもを片端からつかまえて、ポンプを引き上げ、予備のものと取りかえました。

簡単に「取りかえました」なんていうしろものではありませんでした。何しろポンプ本体だけで、40キロ近い重量があります。設置の時にもうちょっとよく考えればよかったのですが、ゴミよけのため、ポンプはこわれたペットケージを利用して作った金網のかごに入れてありました。このかごが、たままった砂に半分埋まって、引けども、掘れども、びくともしなくなっていたのです。

かごの屋根の部分からポンプとパイプを取り出せるようにしておけば、そんなに苦労はしなかったはず。でも、あけられるのは側面だけ、おまけにポンプは底の板に取りつけてあったから、たまりません。その上、ステンレス製のはずのポンプ本体は、まるで小型の焼却炉みたいにさびさび。パイプとのジョイント部分のねじがうまく外れたのは、奇跡と言いたいほど。

底板に取りつけてあった下のカバーの部分がすっかりさびてまろくなっていたので、思いきり引っぱった拍子にねじ切れてとれてしまい、結局ポンプ本体は無事に引き上げることができました。修理もどうやらできるとのこと。塩分ばかりか硫化水素にもさらされて、苦労の限りをつくしたポンプさん、お疲れさまでした。

故障はポンプだけではありません。3年間働いた水車「せせらぎ1号」は、何度かの故障を無事のりきってきたのですが、もしかしたら、そろそろモーターがいかれてきたかも。一方、排水時に勢いのついた水流をまっさきに受けるため、ちょいちょい障害物におつかって軸やプロペラが外れたり折れたりしている「せせらぎ3号」は、たぶんまたジョイントが折れているようです。運悪く、底の泥の中に埋まっていた自転車かオートバイのハンドルの部分にひっかかってしまったのです。修理する前に、まず埋まっている自転車を掘り出してどけなければなりません。そんなこんなで、目下健全な水車は「せせらぎ2号」1台だけ。これは日中しか動いていないので、また酸欠がひどくなりほしくないか、とひやひやしています。実際、午前中など観察舎前の「深み」のまわりで、硫化水素の大量発生を示す気味の悪い白緑色(白根火山の火口湖の色)の水がひんぱんに見られます。もっとも、もしこれで泥の状態の悪化が見られれば、水車の効果が更にはっきりするわけだ、という期待もないわけではないのですが。

新池の方はアシのコントロールに大わらわ。水鳥にとって都合のよい開水面を確保するため、ひたすらアシを刈るっきゃない! 8月に刈った後にのびた新芽がもう1メートル近く。ユウツです。でもとなりの旧淡水池では、水位が20センチほど上昇したために、アシの枯死が目立っています。だいたい水深が40~50センチ以上になると、アシ原は溺れてしまうようです。これをうまく利用したいと思っているのですが。

現状維持、現状改善。やっぱりたいへんですね。助っとさん、きてくれえ!

秋の一斉カウント (シギ・チドリ調査)

9月15日、恒例の一斉カウントが行なわれました。好天にめぐまれた割には、友の会の担当地域にはシギ・チドリが少なかったようです。ともかく暑かった！ツバメやコアジサシはほとんど姿を消しましたが、カモの渡来は遅めで、少数が記録されたのみ。

鳥の種類	行徳保護区	新浜鴨場	江戸川放水路	妙典	原木中山	行徳塩浜沖 9/16	合計	鳥の種類	行徳保護区	新浜鴨場	江戸川放水路	妙典	原木中山	行徳塩浜沖 9/16	合計
カイツブリ	5	24			2	1	32	ユリカモ	7						7
カワウ	940		2				942	ウミネコ	265		75	1	10	333	684
コイサギ	41	37		1	32		111	アジサシ	2		5			568	575
タイサギ	43	6				4	53	コアジサシ	2						2
コサギ	59	21	12	11	15	1	119	キジバト	10	20	1		6		37
アオサギ	60					1	61	ツバメ	1						1
カルガモ	123	9					132	ハクセキレイ	9	3		1	15		28
オカヨシガモ		2					2	ヒヨドリ	5	14		6			25
ヒドリガモ		1					1	セウカ			3				3
オナガガモ	14						14	モズ		3					3
ハシビロガモ	11						11	カワラヒワ	1	1			1		3
スズガモ	1						1	スズメ	26	80	6	11	30		153
ミサゴ	1						1	ムクドリ	2	58	2	2	3		67
チョウゲン科				3			3	オナガ	1	5			1		7
キジ		5					5	ハシロガラス	4	2			1		7
バン	1						1	ハシバト		7			12		19
コチドリ	16						16	カラス SP.					1		1
シロチドリ	16		34				50	種類数	38	19	16	10	14	11	48
メダイチドリ	9		16				25	個体数	1757	323	152	60	131	1000	3423
ムナグロ	18		4				22	シギ・チドリ							
タイセン						20	20	種類数	14	0	8	2	2	5	16
アオアシギ	8						8	個体数	123	0	79	24	2	92	320
タカアシギ	8						8	担当者							
キアシシギ	12		11	23	1	20	67	行徳保護区：鈴木博之・角 隆博							
イソシギ	10		1		1		12	谷 利明・桑名佐由巳・元西孝嗣							
ソリハシギ	11		7				18	蓮尾嘉彪							
オソリハシギ						1	1	新浜鴨場：蓮尾嘉彪・元西孝嗣							
タイシャクシギ	1						1	桑名佐由巳							
ホロクシギ	2		2				4	江戸川放水路：新妻途夫							
チュウシャクシギ	1		4	1		1	7	原木中山：赤田秀子・田村美智子							
タシギ	4						4	妙典：谷 利明・桑名佐由巳							
セイタカシギ	12						12	行徳塩浜沖：東 良一							
小シギ SP.						50	50								

鳥の国から

蓮尾純子



いきなり、ほんの2メートルと離れていないところから、大きな茶色の鳥がふわっと飛び立ちました。新池の中央土手岸、上池側。歩きにくいアシの刈りあとにふみこんで、がさがさと岸の方に戻ってきたところです。ゴイサギの若鳥と思って何げなく見ると、見慣れたゴイサギの褐色地に白斑という羽色のかわりに、黄褐色地に黒の杉綾模様が目にとびこんできました。サンカノゴイ！ふわふわした飛び方や体形は、ちょうどゴイサギをひとまわり大きくしたようです。双眼鏡を向ける間もなく、サンカノゴイは対岸のアシ原のかげに姿を消しました。9月15日の夕方、保護区初記録。もちろん私も生まれて初めて見る種類でした。遠くでちらちらするのを望遠鏡で必死に見て、図鑑と首びきで調べる、というような確認のしかたでなくて、肉眼でしっかり特徴が見えたし、おまけに新池でお目にかかれたなんて、願ってもないことでした。

サンカノゴイは印幡沼や茨城県などで繁殖が見られているそうで、この7月には浦安の埋立地でも、まるで餌でも運んでいるように、間をおいて同じアシ原に何度か入るところが観察されています。いつか保護区のどこかで繁殖してくれるといいのですが。わが愛読書「オオバンクラブの無法者」アーサー・ランサム作；で、絶滅しかけたイギリスのサンカノゴイの話を読んで以来、ずっとあこがれていた鳥に会えて、大満足。あとは「霧笛そっくり」と言われる声を繁殖時期に聞いてみたい。



暑い暑い暑い、と書くつもりでいたら台風一過のさわやかさ。だらだら続く熱帯夜にグロッキー気味だったので、ほっとしています。でも、あーあ、こういう時って、きっと青潮が出るんです。幸いまだ北風も吹かないし、雨も明日からのことなので、そんなにひどくならずすむといいな、と期待はしているのですが、今年は水門のまわりにはびっしりムラサキイガイがついて、今のところ元気になっているので、ひどい青潮(酸欠水の上昇)が来なければ、冬まで生きのびられるはず。ここ1週間くらいが峠だろうと思います。どうか、汀線一面に魚の死体が散乱する光景を見ないで済みますように。

台風のすぎた後、たいてい明るいオレンジ色をしたウスバキトンボを見かけます。南や西から渡ってきて、適当な池や沼に産卵し、ふ化したヤゴはひと月そこそこで大きく育って羽化するといういそがしい種類です。関東あたりでは冬の水温低下に耐えられず、越冬はしていないとのこと。水温が高い丸浜川で冬ごしてもできたら面白いですね。渡りをするのは鳥やトンボばかりではありません。今この辺で一番数の多いチョウはたぶんイチモンジセセリだと思いますが、このチョウも渡ってきたものだと思います。うっかり禽舎に飛び込んだイチモンジセセリが、ユリカモメにバクリと食べられてしまいました。ごめんなさい。

ツバメやコアジサシが消えて、カモが日増しにふえて。ススキの穂が風になびき、あたりはすっかり秋。早いなあ。

『おいしい水』ってどんな水

寺田一哉

最近のグルメブームはすさまじいもので、テレビでも料理番組というよりグルメ番組というものが、数多くあります。また、特集として扱うことも少なくありません。しかも、健康を気にする人が増えたり、ウォーターバーが若い女性に人気ということもあってか、食べ物だけでなく、『おいしい水』もテーマになっています。しかし、なかにはあまりにも当たり前のことを言っている、普通の人はウムウムと感心してしまうであろう内容のものもあります。

毎日、飲んでいて水ですが、私たちはなんと水について知らないか、驚いてしまうほどです。私自身、数カ月前にはじめて知ったということも、少なからずあるのですが。

さて、『おいしい水』とは、どんな水を言うのでしょうか？ そもそも、いつ頃からおいしい水が貴ばれるようになったのでしょうか？ 昔は、『おいしい水』というものは、日本にはなかったそうです。なぜなら、まずい水が特別なもので、まれな存在だったのです。

日本では、上水道がかなり普及していて、読者のほとんど全員が水道を利用しているものと思います。井戸があっても、飲み水は水道というのが普通でしょう。

水道を大きく分けると、井戸などから取った水に簡単な消毒をした簡易水道と、浄水場で処理された水道になります。また、浄水場も、砂や礫の中をゆっくり通して最後に塩素を加える緩速濾過法（かんそくろかほう）と、化学薬品を加えて加工して強引に飲める水にする（過激で言い過ぎな表現ですが）急速濾過法（きゅうそくろかほう）の二つの種類があります。



日本の水は、たいてい石鹼（せっけん）がよく泡立つ軟水です。ところが、温泉などでは泡があまり立ちません。これは、カルシウムなどが含まれ、硬度が高くなっているからです。硬度が高い水も、おいしくありません。

温泉の近くの水が、まずいことはよく知られています。アメリカのような硬水の場合は、急速濾過法が適しています。話はそれですが、石鹼が使えない地域では、合成洗剤はなくてはならないものです。しかも、無リン化がむずかしく、有リンのものが少なくないようす。合成洗剤も不必要なものではなく、どうしても必要な場合もあるのです。

急速濾過法の利点は、汚れた水も飲めるようにできることです。このため、私たちは飲み水に不自由しないですんでいるのですが、反面、水の汚れに無関心になっているのかもしれない。水道水には、満たすべき基準がありますが、それにはるか及ばない水を原水としていることも少なくありません。緩速濾過法では、汚い水だと目詰まりをおこしてしまいます。汚すぎると、砂の中が無酸素状態になってしまうことさえあるそうです。もちろん、好気性のバクテリアを利用した方法ですの、酸素がなくなると機能しなくなってしまいます。



急速濾過法が、米国から導入され普及するまで、まずい水はほとんどなかったのです。

さて、先日、行徳に住んでいるSさんと都内の地下鉄のホームで、ウォータークーラー（ボタンや足でペダルを押すと冷たい水が出てくるやつです）の水を飲んだ時、「この水、まずくないでしょう！」と、聞いてみました。「おいしい」が、その答えでした。私は、おいしいとは思いませんでしたが、飲めないものではありませんでした。

ほんとうに、この水は、おいしかったのでしょうか。

江戸川の水である行徳よりは、ましかもしれませんが、そんなにおいしいはずはありません。Sさんが、おいしいと感じたのは、疲労のせいもあるのでしょうか、実は、水が冷たかったからです。

環境庁が、『おいしい水』とはどういうものかを調べたことがありました（もっと、やるべきことがたくさんあるとおもいますが、審議会をつくってやりました）。そのなかにも、水の温度がありました。

どんなに、まずい水でも、冷たくしてしまえば、それなりにおいしく感じてしまいます。冷やすことで、においも薄らぎます。湧き水がおいしいのは、地中でゆっくりと適度のミネラルなどの成分が溶け込んでいることにあるのですが、冷たいことも大きな理由にあげられます。したがって、なまぬるい湧き水より、冷たい（普段はまずいと感じている）水道水の方が、おいしく感じられるでしょう。水の飲み比べでは、水温を同じにしないと、結果が正しくでないようです。



最近では、水が清涼飲料水として高い値段で売られています。もともと、おいしい水の国であった日本では、考えられないことでした。欧米の水のなかには、カルシウムやマグネシウムなどが多く含まれて、硬度が高く、洗濯（せんたく）に適さないばかりか、飲むこともできないものがあります。そういうところでは、ミネラル・ウォーターが商品として流通しているのですが、ふだんからおいしい水が飲めるなら、わざわざ高いお金をだして、水を買ったり、ワインやビールを代わりに飲んだりはいらないはず。

今、売られている水の多くは、もともとおいしい水ですが（変な言い方！）、商品化する時に、加熱殺菌されて、水にとけている炭酸ガスがとんでしまっていることもあります。そうすると、ほんとうにおいしいか疑問もできます。

日本料理は、フランス料理や中華料理とはことなり、素材を生かした調理法をとります。新鮮な材料が得やすかったことが、よく理由にあげられますが、さらに、良質の水に恵まれていたことをあげる人もいます。日本の水は軟水で、だしのうまみがちゃんとだせるからだそうです。化学調味料の普及で、鰹節や昆布の出汁の繊細な味がわかる人が少なくなっているのは、残念なこと。これが、硬水では、にごってしまったらして、味が落ちるそうです。

それでは、西洋料理ではどうやってダシを得ているのでしょうか。スープストックは、ゼラチン化することによって、うま味をたもっています。生活の知恵というか、おいしい食べ物にこだわるのは、世の東西を問わず共通なのでしょうか。

ある町で、新しい浄水場ができて二つになったのですが、片方の配水地域の喫茶店や食堂から客足が遠のいたことがあるそうです。古い方が緩速濾過法で、新しい方は急速濾過法の浄水場であったのです。時間もかかって、広い場所を必要とする緩速濾過法の方が、自然な水が得られるようです。人の味覚というのは敏感なものです。

日本茶や紅茶は、水の良いところで飲まれているようです。コーヒーは多少許容性がある、少しぐらいわるい水でも飲めるので、最近コーヒーを飲む機会が増えているという説もあります。でも、良い水のほうがおいしいですね。

なお、おいしいお茶を飲もうと、パックされた水を使って紅茶と入れると、含まれているミネラルのせいで色がでにくくなる場合がありますので、注意が必要です。

今、私たちが、簡単に飲めるおいしい水は、井戸水です。海に近い行徳には、良い井戸がないのは残念です。さて、川は汚れても、井戸水なら安心と思っていたら、たいへんなことがわかってきました。水道水には、浄水場の処理の過程で、トリハロメタン（今は使われていませんが、生物の解剖の実験で麻酔薬として使われたクロロフォルムもその一つです）などの、有害性が指摘される成分が含まれますが、井戸水でも、クリーニング工場やハイテク工場から漏れだした有機溶剤（簡単にいうと、化学的な洗剤）が検出されています。また、農薬などが入り込んでいることもあるようです。水さえ、安心して飲めない「水の国」になってしまったのでしょうか。

ところで、浄水器がよく売れているようです。最近の製品は、かなり性能が向上し、活性炭の使い方を間違えなければ、それなりの効果はあるのですが、必ずしも有害物質がすべて取り除けるわけではありませんので、過信は禁物です。

しかも、浄水器を使っていると、今飲んでいる水のほんとうの味がわからなくなってしまう。そこで、おいしい水を飲みたいと願っている人たちのなかには、あえて、浄水器を使おうとしない人が、少なくありません。

水道の水をおいしくするには、川の水をきれいにしなくてはなりません。そのためには、いままでとは違った革新的な水の処理システムを確立することが必要です。それには、家庭排水の処理をしっかりとやらなければなりま

せん。もっとも、特別の技術を開発するというより、今までの技術を組み合わせれば実現できるような、発想の転換によって解決できるものが多いと思いますが、いつできるかわからない流域下水道を待っていても、状況を悪化させるだけですし、下水処理場を作ればよいというわけでもありません。

富栄養化して汚れている琵琶湖では、下水処理場が汚染源の一つになっています。そして、琵琶湖から流れ出た淀川の水を飲んでいる大阪は、日本で最高の浄水技術をもっているといわれています。それは、水道法の基準に合わない最高に汚れた飲めない水を、飲むようにしているからです。淀川には、京都などの下水処理場の水が流れ込み、さらに汚れを増しています。その水が飲まれているのです。千葉でも、実情はそんなにかかわらずです。

排水が川に直接入るより、下水処理場を通った方が良いかもしれません。しかし、一カ所に集中することには、問題があります。しかも、汚れた川よりもっと汚い水が流れ込むのです。下水処理場が川をきれいにするとは、一概にはいえないのです。マイナス面もあるのです。

どうしたら、水がきれいになるか考えないと、おいしい水は飲めません。パックされた『おいしい水』ばかりを飲んでいてもつまみません。おいしい水がいつも飲める生活ができると良いですね。

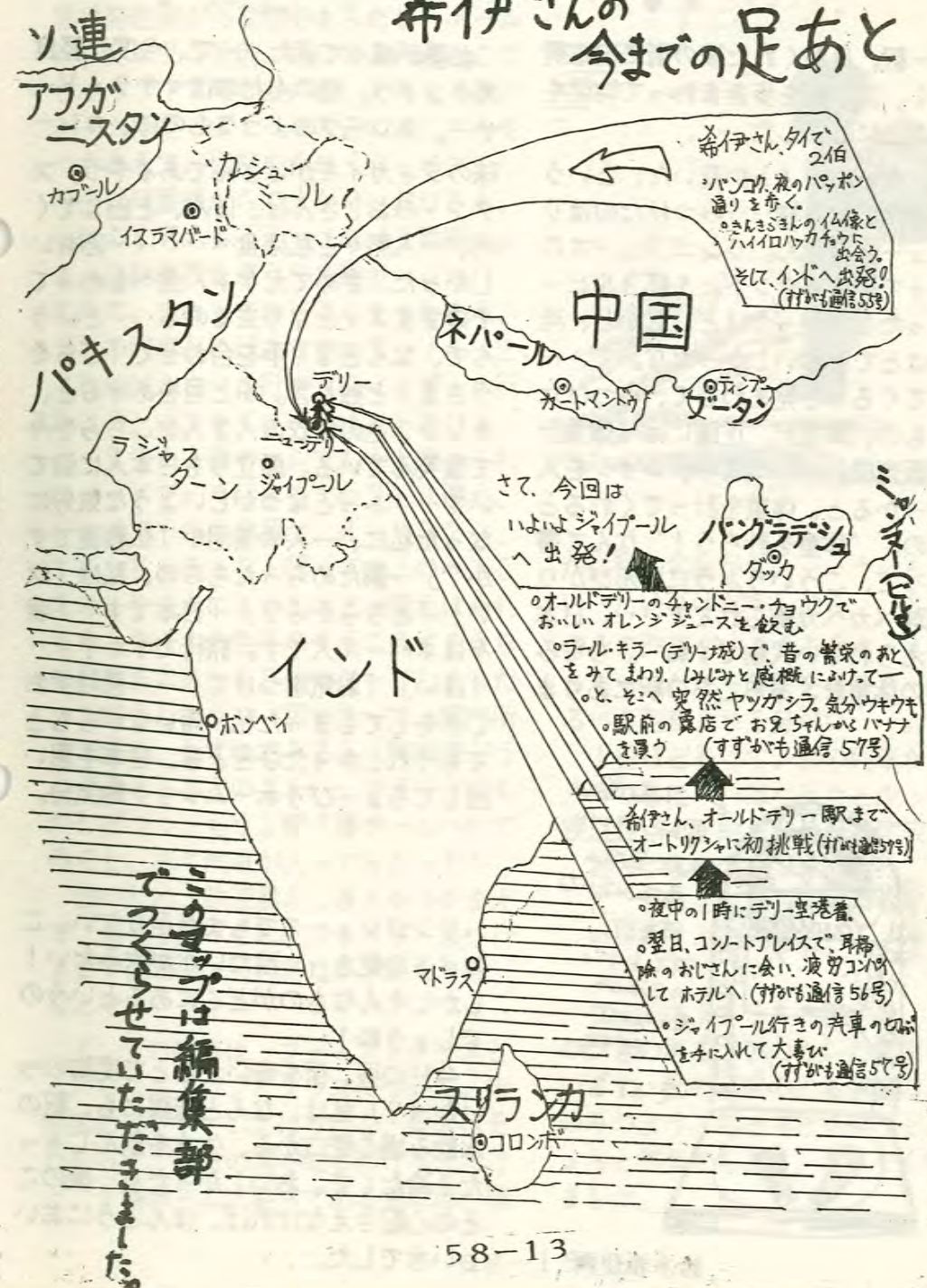
今回は、生活にかかわるおいしい水を考えってみました。水の基準などについては、別の機会に譲りたいと思います。



インドひとり旅

その4
鈴木希伊

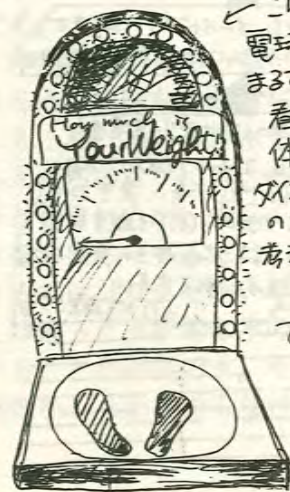
希伊さんの
今までの足あと





デリー駅。日がくれた後の街に出る勇気はなく、広い駅を歩きまわって時間をつぶすことにしました。

まず、うーん、ノドが乾いた、というんで、冷たい飲み物……みつけたのはリングジュース屋さん。リングジュースのみを売っているスタンド。1杯3ルピーと高かったし甘かったけど、しかし、冷たいのはとてもおいしかったな。で、一息ついてぐるっと見まわして、みつけたヘンなもの、体重計。正確には『体重計り自動販売機』……つまり、コインを入れてのっかると、体重を計ってくれるというもの。“体重を計ろう！”なんて書いてあって、こういうふういきんぴかりんに電球ペカペカ飾られてて……。日本じゃ考えられない代物ですね。ちなみに、この体重計、あちこちの駅にありました。



←こんな風にも
電球ペカペカ
まるで盛場の
看板みたいなの
体重計。
タイエトアム
の日本じゃ
考えられない
代物
でしょ？

鈴木希伊画

お腹が減ってきた……で、今度は軽食スタンドへ。たのんだのはマサラ・ドーサー。クレープのようなものに、カレー味のジャガイモがはさんであるやつ。スタンドのおじさんは、ほん、と出してくれ、一人黙々と私は食べ……（一応おいしかった、さめてたケド）食べおわってそのままスッと立ち去るのも……というんで、なんとなく手を合わせて「ごちそうさま」と独り言。ふと目をあげると、オレンジ色の僧衣の人2人がこちらをみて微笑んでいる。顔立ちも日本人に似ていて……ふっとなつかしいような気分になった私に、一人の僧侶が「仏教徒ですか？」一瞬ためらったものの、私は「はい」「どちらから？」「日本です」「我々はネパール人です。旅行ですか？」「はい」「お気をつけて」——思わずおじぎをしてしまった私。短いながらもとてもうれしかったひととき、日本を思い出してちょっぴりホームシック的気分。

リングジュースでもまだ足りない、このノドの乾き……冷たい水が飲みたい！しかしそんなものがどこにあるのでしょうか！

今日の昼、街を歩いたことで度胸のついた(?)私は、なんと無謀にも、駅の水飲み場の蛇口から、生水を飲んじゃった！冷たくて、おいしかった……後のことの心配さえなければ、ほんとうにおいしい水でした。



だんだん汽車の時間も近づいてきて、私は待合室から荷物もちだし、ホームへ。発車20分前、私ののる汽車どこでしょう???時刻表に書いてある7番のホームは空っぽ……その辺のおじさんをつかまえて、切符をみせ「ジャイプール行きは何番線からですか？」おじさん、しばらく考えて「えーこれは6番線だよ」えっ?時刻表と違う?6番ホームに行ってみて、またもやおじさんをつかまえ、「この汽車どこ行きですか?」「えっと、これはビカネール行」「ジャイプール行きは?」「ジャイプールは11番だよ」えっ???11番ホームでもう1度「これはジャイプール行きですか?」「違う、ジャイプールは2番だ」えっ???

あっちゃこっちゃ行っては、のべ15人あまりの人にきいたけど、答えはそれこそ10人10色!?そうこうするうちに発車まであと10分になってしまった……どうしよう……思いきって、案内所まで戻り、たずねてみると、時刻表どうり7番ホームとのこと……???と首をかしげつつ、もう1度7番ホームへいてみると、あ!汽車が入ってきたっ!!

念のため、鉄道員らしき人をつかまえて、もう1度「これ、ジャイプールへ行きますよね?」「行かない」えっ?な、なんで……??

インドの列車は、ファーストクラスとA/C(エアコン)クラスについて、指定席の表をホームにはり出し、乗客はそれを見て、自分の席を知るわけなんだけど、7番ホームに貼ってある表には、確

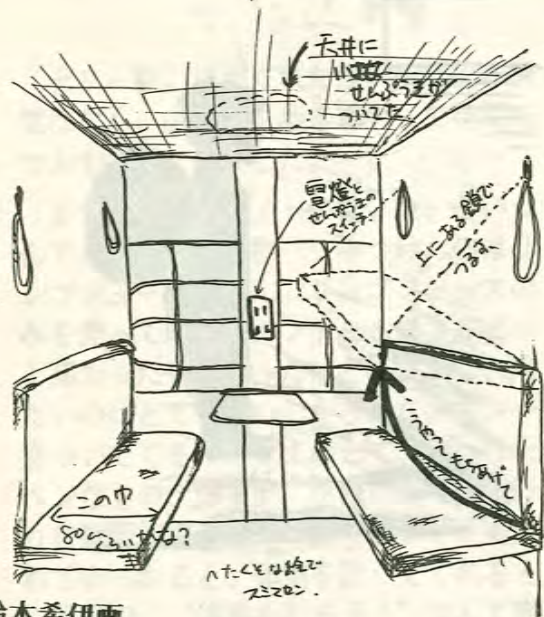
かに私の名前がない……うーん、困ったいったい私はどうしたら……と、7番線のその汽車がするするとホームを出ていっちゃった……時計をみると……私の乗るべき列車より5分早い……。

1分ほどあけて、別の列車がホームに入ってきて……ばたばたと走ってきた、鉄道員さんが貼りだした座席表に……

あっ!私の名前!

-K. SUZUKI, Miss, 21-
やった!この列車だー!!

ファーストクラスの寝台は、4人1つのかぎのあるドアのついた個室になっています。私の名前のある個室は、私1人のみのよう。ちょっと怖いけど、またちょっと気楽でもあり。さっそく乗り込みました。



鈴木希伊画

づいては、私ににっこりと微笑むとっても美人なお母さん。女の子ははにかんでお母さんのうしろにかくれ、男の子はくりくりとした目でじーっと私をみつめていました。

ずん！と揺れ、汽車発車。SLって、ほんとうに何ともいえない素敵な感じ。だんだんスピードを上げ、レールの音も、カッタンタン、カッタンタン、と軽快なリズムに、少年時代レールの歌を仕事帰りに聞くのが楽しみだったというドヴォルザークの作曲したユーモレスクを思い出して、私は鼻歌まじり、ごきげん。

そのうち一家はお弁当をひろげまして、チャパティと魚のフライとダール（豆のカレーのようなもの、日本でいえばみそ汁ってところでしょうか）。

わはは、そんなとこまでしっかり観察しちゃって、ちょっと失礼だったかしら。

私はお腹はへってなかったけど、なんか、とてもおいしそうに見えました。食後、一家は、キルトの寝袋をひろげ出し、私も横になりました。といっても、私は寝具なんてもってないんですが……お父さんが、「かける物を持ってないんですか？」と心配顔なので「日本の冬はインドよりずっと寒いですから、平気です」とへんないいわけを試してみたものの……夜中、ほんとうに寒い！寒くて眠ってなんかいられない！

30分おき位にうとうとしては目を覚まし……をくり返すうち、汽車が止まり、なんとなくざわざわ騒がしくなってきました、そのうち、ドアをノックする音、お父さんが起きて、ドアをあけ、車掌さんとはばらく話をしたあと、私をふり返り、「事故で1～2時間遅れるようですよ」は一ん、事故かぁ、なんてぼんやり考えつつ、またうとうと眠ってしまいました。

こういう風になっていて、寝台にするときは、背もたれをもちあげ、上にある鎖に引っかけて吊り、2段ベッドのようにするわけです。シートはビニール貼りのわりとごつごつしたやつ。窓には鉄格子がはまっています、なんかオソロシ気だけど、これは盗難防止のためとか？

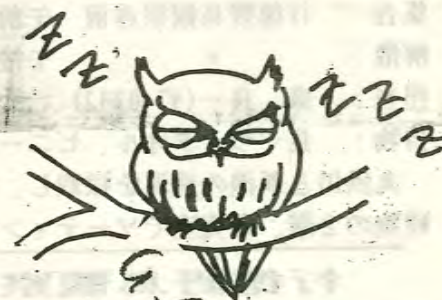
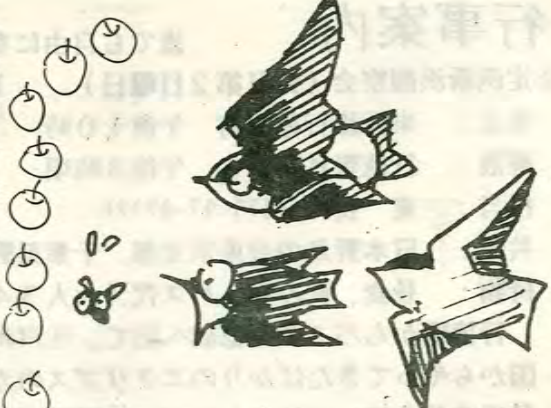
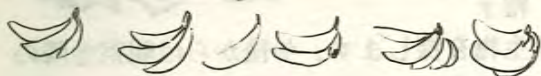
個室を覗察していると、ドアが開き家族連れが入ってきました……お父さんとお母さん、10才くらいの女の子と3～4才の男の子の計4人。表にはのってなかったけれど、一緒の個室になったよう。家族と一緒になら心強い！

一家のうち、英語を話せるのはお父さんだけで、お父さんと少し話をしました。時々奥さんに通訳をしながらの、とてもやさしそうなお父さん、うんうんとうな

朝の5時頃、どうにも寒くて起き上がると、一家も起きたところ。寝具をかたづけると、カバンからグアバを出してすすめてくれました。ありがたく、いただいて食べていると、男の子が私のわきを指さして、「ケラ～！」とぐずりだしまして……そこにあったのは、デリー駅前で買った50パイサのバナナ。あ、これ、どうぞ、とさしだすと、男の子はうれしそうににこにこ、私もにこにこ……

そのうち、汽車は駅にとまりました。一家はこの駅で降りる様。お父さんには「Good-bye」それから、全員に向かって、手を合わせて「ナマステ」。ナマステ、ヒンズー語のあいさつです。

さて、ジャイプールまで、あと少し。――と、思ったのですが……！？



グリーン丸浜川祭 (7月29日) 参加報告

お天気に恵まれた昨年と違って、今年はその日の朝から降ったりやんだり。これで本当に実行できるのかしらと心配しながらも、夜のバーベキュー大会だけは意地でも実施させてやる、と食い気は健在いそいと観察舎へ。

午前の部は、廃油を使った「プリンせっけん」づくり。会場の観察舎図書室では、親子づれなど十数名がエアロン姿で奮闘。せっけんの出来具合はいかがでしたかな？

午後からの外、ミひろい、なやんだ未実施。時おり、不中、丸浜川の岸の班、ユリが、で遠征する班の二手に分かれ、出発。さすがに昨年よりも一般参加者は少なかったのですが、みなさんとても熱心にゴミをひろって下さいました。本当にごくろう様でした。雨にぬれた芝生の中ですいかわりを楽しんだ後、夕方からいよいよバーベキュー。雨がこわくて結局観察舎展示室わきのポーチの中で。でも、一般の方も少数ながら参加して下さったし、何よりもあったかくておいしいバーベキューに、花火も加わって、たいへん楽しい一日でした。来たかい、ありました。(D)

★「大きな森の小さな訓練校」は都合によりお休みさせていただきます。次号からまたお楽しみいただく予定です。

★「新入会員」も次号送り。新しくお入りになった方、ごめんなさい。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会（毎月第2日曜日） 10月8日、11月12日

集合：東西線行徳駅前 午前10時

解散：行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当：東 良一

共催：日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会

持物：昼食、飲み物、バス代（大人340円、子供180円）



行徳駅からバスで行徳橋へ出て、江戸川土手を河口へ2kmほど歩きます。北の国からやってきたばかりのエクリプスのカモ達をゆっくりと観察しましょう。河口付近で昼食後、午後からはバスで保護区へ向かいます。保護区の中も1kmほど歩きますので、歩きやすい服装でおいで下さい。小雨決行。

☆丸浜バードリバーを調べよう

10月22日（日）、11月26日（日）

集合：行徳野鳥観察舎前 午前10時

解散： " 午後3時頃

担当：東 良一

持物：長ぐつ、タオル、ビニール手袋、帽子



丸浜川と新池の底泥を採取し、中にある生物を探します。午後からは観察舎隣の建物の2階、研究室でソーティングをしています。

行徳野鳥観察舎は

10月31日まで休館中です。

改修工事は着々と進行中ですので、今しばらくお待ちください。

編集後記 ☆休館中をさいわい、とばかりに、あちこちとび歩いています。いいでしょーっ。尾瀬、アラスカ、名古屋、我孫子。シギたちが繁殖するツンドラを自分の足で踏むことができ、大感激。そのうちちゃんとお報告します。ほら、今号にはネコのネの字も書かなかった！ネコ恐怖症の阪本くん、ほっとした？（純）

☆ただ今、新館工事中。月一度のベントスの調査も、バンディングも、この編集作業も、みんな一緒にプレハブのせまい旧館でやっています。他の人には迷惑のかけっぱなしだけど、僕個人的にはとってもいい雰囲気だと思います。ところで、どんな新館になるんでしょうねえ。（D）



すがも通信 No. 58

1989年10月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

事務局

編集 清水大悟、蓮尾純子

編集協力 東 馨子、市川 拓

行徳野鳥観察舎